

○表 真美 佐伯万里

(京都女大)

目的 戦中・戦後および 1970 年代と現在との主としておむつにかかわる育児労働の違いを明らかにすると共に、紙おむつが子育てに及ぼした影響を探ることが、本研究の目的である。

方法 1996 年 7 月に、大学生の祖母 115 名、大学生の母親 114 名、学齢前の子をもつ母親 86 名を対象に、留置法による質問紙調査を行った。調査内容は末子養育時の育児・家事労働、社会参加、外出頻度、家庭生活満足度、育児意識および現在の紙おむつに関する考え方等である。

結果 1) 大学生の祖母世代は全員が主に着古したゆかたを材料におむつを自分で手作りしており、洗濯機があった者も 6 名いたが半数以上は水道もなかった。大学生の母世代は紙おむつのみの使用が 3 名いたが、80.5%が布おむつのみ、16.8%が併用であった。若い世代は併用が 52.4%、紙おむつのみが 47.6%で布のみの者はいなかった 2) 育児意識を世代間で比較すると、祖母世代は「育児は我慢が多く毎日同じことの繰り返しで視野が狭くなる」とすると同時に「楽しく安定していた」と肯定的に受け止めていることが特徴である。3) 紙おむつを「赤ちゃんによくない」と回答する者は祖母世代に最も多いものの 3 割程度にとどまり、自由記述でも「便利だ」といった意見が目立った。4) 母世代においては紙おむつを併用していた者の方が育児を肯定的に受け止める割合が高くなった。